



MILK-LOVE
ミルクらぶ

癒しのにゅへライフ

小説 神崎美宙

挿絵 uni8

序章	
第一章	お姉ちゃんのおっぱい
第二章	波乱は加速する
第三章	先生と初体験
第四章	クラスメイトの誘惑
第五章	ミルくらぶ
終章	

登場人物紹介

Characters



もりもと 森本かなみ

雪伸の幼馴染み。物静かで大人しい性格だが、雪伸を庇って美貴と相対することも。バストサイズはCカップ。



おさない まい 長内舞衣

雪伸の義理の姉。雪伸ラブで、時には過剰な愛情表現をしたり。バストサイズはメートルオーバーのHカップ。



ほうじょうみ き 北条美貴

雪伸とかなみのクラスメイト。生粋のお嬢様で、何かと雪伸につっかかってくる。バストサイズはGカップ。



う さ み さ な え 宇佐美早苗

学校の養護教諭。明るくて優しく、男女問わず人気がある。バストサイズはメートルオーバーのIカップ。



おさないゆきのぶ 長内雪伸

死の呪いにかかってしまった不幸な少年。呪いを解く方法がとんでもない内容のため、途方に暮れる。

黒猫

死神の使いを名乗る喋る猫。ラーメン（特にとんこつ）が大好き。

これだけの色香を漂わせながら、乳輪や乳首にはほとんど色素が沈着しておらず淡いピンク色をしていた。Iカップという日本人離れした大きさながら、美しさを極める早苗の乳房の美の象徴とも言えるその乳首。童貞少年の視線はまさに釘付けだった。

「おっぱいには結構自信あるんだけど、気に入ってもらえたかしら？」

「そ、それは……」

先生の強引なアプローチに戸惑っていた少年も魅惑の生乳を目の前に、すっかり大人しくなってしまった。本人とは反対に股間の逸物は力強く勃起し、物欲しげにヒクついていく。完全に頭の中は早苗先生のおっぱいに夢中だった。あのおっぱいからミルクが噴き出す姿を想像するだけでバクバクと心臓が高鳴る。

正直すぎる反応に年上の女性は苦笑を浮かべたが、すぐに淫猥な笑みに戻った。

「それじゃあお披露^{ひろめ}目はこれくらいにして、そろそろ……」

到底手のひらには収まりきらない両乳を下から持ち上げ、早苗が少年の股間に身体を沈める。その瞬間に男根がふにゅつと滑らかで柔らかな感触に包まれた。

ふにゅ……。むにゅ、ふゆん——。

すっぱりと乳房に挟み込まれてペニスも完全にもちもちとした乳肌の中に埋もれ、悦びのあまりに谷間の間で小刻みに震える。

「う、あつ……。や、柔らかいっ……」

手コキとは比べ物にならない柔らかさ。フェラチオとも違う温かな乳挟みの快感がじわ

じわと股間の辺りに広がり、身体中が蕩けてしまいそうだった。逸物を乳肉に埋めているとどこか性感とは違った心地良さも感じる。

モチモチとした乳肌は吸いつくようにペニスに絡みつき、溶けるような温かな柔らかさに包まれた。

「出そうになったら遠慮なく出しちゃっていいからね」

生乳包みの感触に感動しきっている少年に意味深な視線を送ると、早苗は両脇から重たげな乳房を抱え直した。むにむにと軽く乳肉を揉んだだけでペニスはもちろん、滑らかな肌とたつぷりとした重量感を感じる太股と股間全体が快感に包まれる。

「す、すごっ……いっ……」

むにゅっ、にゅ、にゅむ……。むにゅーっ。

スイカほどもある巨大な乳房がゆっくりと上下に動かされ、優しく男根が扱かれて思わず声を漏らしてしまう。つき立ての餅のように柔らかく温かですべすべの肌が、怒張全体を撫で擦る。

張り出したカリやその裏、血管を浮かび上がらせている肉幹に早苗の爆乳が吸いつくように密着し、大きく上下に揺れた。手に余るサイズの乳肉は少し動かしただけで派手に弾み、思わず扇情的に踊るピンク色の乳首を目で追ってしまふ。

「うふ……ユッキーのおチ○ポ、とっても熱くなってる」

脚の間には学園一の美人先生が自慢のおっぱいを丸出しにして、パイズリ奉仕を続けて

いる。すでにキャミソールはずり落ち、白衣がはだけて露わになった首筋から肩口へのラインがやけに色っぽい。

「あは、ンっ……どう、気持ちいいでしょ？」

これだけのサイズと重量感溢れるおっぱいを揺らし続けるのは、やはり重労働なのか肉感的な唇からは熱っぽい吐息が漏れ始める。乳肌も微かに汗ばみ、しっとり濡れた肌が男根との摩擦をさらに滑らかにしていく。

「は、はいっ……気持ちいいですっ」

素直に感想を口にした少年はベッドに手足を投げ出し、美女の与えてくれる乳ズリの快感に酔いしれていた。全身から力が抜けてしまい、股間の逸物だけが唯一力強く脈動し勃起している。

「悦んでもらえて、ンふふ……嬉しい、わあ……これ疲れちゃうから、本当に好きな人しか……あは、してあげないんだからね……」

先生の好きという言葉に思わずドキつとした。大人の早苗が自分のようなガキンちよ相手に恋愛感情を持つなんていまだに信じられない。だけどサファイアのような瞳は澄んでいて、献身的な乳淫奉仕からも彼女の本気さが伝わってくる。

「あ、ああ……先生え……」

にゆるっ、むにい……ふにゆ、むにゆうう……。

徐々に乳ズリの速度が速くなり間に挟まれ揉み扱かれているペニスが痛いくらいに勃起

し腰が抜けそうになる。

「ダメよ、二人の時はちゃんと、ンっ……名前で呼んで……」

額にも汗が滲みサラサラの紅髪が数本張りつき、長い前髪を一本咥えた唇が甘えるように要求してきた。快感に翻弄されろくに働かない頭で悩んでみても、断る理由なんて思いつくはずもない。

「さ、早苗先生え……」

「あふ、違うでしょ……先生はいらないの」

年下の恋人に再度ダメ出しをしつつ、女教師は激しく両乳を擦りあわせ弾ませた。

「早苗さんっ、気持ちよすぎて……もうっ！」

初めにおっぱいに包まれた時の温かい安心感のような心地良さは、いつの間にか強烈な肉悦へと変化し始めている。大きく揺れるメートルオーバーの爆乳の谷間から時々顔を覗かせる亀頭はドバドバと先汁を漏らし、乳肌と擦れあって白く濁っていた。

「ああ……もう、可愛いわね！ もっと気持ちよくしてあげたくなっちゃう」

興奮気味に声を弾ませた早苗は乳摩擦を繰り返しながら、頭を下げて突き出した肉の矛先をぱっくりと咥え込んだ。ギンギンに張り詰めた亀頭が乳房とは違う感触に包まれ、熱く濡れた粘膜が絡みついてくる。

「あひいっ……」

予想もしていなかった突然の刺激に少年は情けない声を漏らして悶えた。

「んっ、ちゅ……ンむ、ちゅば……」

舌が先端の小孔を穿る^{ほし}ように突つつき、唇が敏感なカリ裏に吸いついてくる。肉竿は依然として乳肉の搾り上げるような責めを受けているせいで、限界まで勃起し今にも達してしまいそうだった。

「くっ、あっ……ま、待つてくださいいっ……」

美女はチュパチュパとワザとらしい水音を立てて亀頭をしゃぶり、先端を舌先でくすぐるように舐める。雪伸は堪らずに待ったをかけるが、お姉様の愛撫は止まらない。

むしろ射精を促すようにさらに乳房をこね回し、唇と舌を使って男根を刺激する。

「ンふっ、ちゅっ……ダーメえ、ちゅぷ……」

先端から漏れる先汁を舐め取り、尿道の奥にある精液を吸い上げるように強烈にしゃぶりついてきた。未知の快感が怒濤^{どとう}のように連続で襲ってきて、頭が麻痺してしまい意識が朦朧^{もうろう}としてくる。

股間には欲望の塊がじわじわと込み上げ、射精が近づいていた。

「はぁン、あっ……何だかおっぱいもお熱く……ちゅっ、なつてきちゃったっ……」

股間の上で弾んでいた乳肉の先端はいつの間にか硬く尖り、美女も乳ズリの快感で興奮しているようだ。

ぴゅ、ぴゅるっ……ぴゅぷ、ぴゅるるっ……。

そして桜色をした乳首に白い粒が滲んできたかと思うと、勢いよくミルクが噴き出して

くる。

「ンンっ、あら……？ ユッキーの濃い我慢汁舐めてたら、おっぱいが出てきちゃったみたい……」

うつとりと目を細める紅髪の美女は悪戯っぽく微笑むと、赤い舌を自らの乳首に伸ばしてちゅるちゅるとミルクを舐め取った。

ぴゅー、ぴゅ、ぴゅっ……ぷぴゅっ、ぴゅぶ、ぴびゅるううう……。

昨日舐めた精液の影響なのか、先汁に含まれる僅かな精液に反応したのか分からないが、まさにミルクタンクのような乳房からは次々に母乳が溢れる。

その光景があまりにも淫らで、射精感さらさら高まった。

（す、すごい、自分で舐められるんだ……）

次々に硬くなった乳頭からは母乳が溢れてきて、ピンク色をした乳輪を白く濡らし乳丘を滴り落ちていく。

「ふふ……我慢してないでえ……ちゃんと精液飲ませてえー」

早苗は迷いなく濡れた乳首を肉幹に押しつけ母乳と先汁で濡れたおっぱいをにゅるにゅると揉みあげる。

ズッチャズッチャ、ニチュッ……ニチュグチュッ……。

生温かい液体がペニスに塗り込まれ、乳肌の滑りがよくなりパイズリの速度がどんどんと上がっていった。

「だ、だってっ……うくっ！」

限界まで勃起した肉棒はビクビクと小刻みに震え出し、雪伸は菌を食いしばって押し寄せる快楽に必死に耐えていた。すぐにでも美女の口に精液をぶちまけて、肉悦に身を委ねたいという感情に流されそうになるが、もっとこの乳愛撫の快感を味わっていたくて崩壊寸前のところで理性が待ったをかける。

ズリユッ、ニチュ……ジュル、ニチャムチュ……。

「だってじゃないのっ……早くイっちゃいなさいっ！」

そんな少年の抵抗を楽しむように早苗は意地悪な笑みを浮かべ、乳愛撫は激しくなる一方だ。乳肌のすべすべの感触にミルクという潤滑液じゅんかつが加わり、乳房のマシユマロのように柔らかい質感の心地良さをさらに際立たせる。

母乳と先汁と汗でグチャグチャに濡れた肉幹に当たる二点の硬い尖りが敏感な箇所を擦り、舌先が我慢汁の溢れる鈴口を穿り亀頭全体を唇で愛撫されて、もうこれ以上は我慢できない。

「ぐっ……ああッ！ ほ、本当にヤバ、イっ……」

ベッドのシーツを掴み身悶えする雪伸は全身にビッシヨリと汗をかき、神経が下半身に集中する。

「あはあ……何だか、ちゅむ、私もお……ちゅ、んむう……私も、気持ちよくなって、きたわ、んはっ……」

次々と溢れる白色の液体は濃厚な香りを漂わせ、乳房とペニスだけでなく少年の股間まで濡らしている。美女の頬もほのかに上気し色っぽい吐息を漏らしていた。

「早苗さんのおっぱい柔らかくてっ、温かくて……あくうっ!!」

ただでさえ性感に耐性のない童貞ペニスがいくら頑張ったところで、お姉様のパイズリフェラ責めに敵うはずがなかった。

「イ、イクッ! 本当に出ちやいますッ!!」

艶やかな紅色の長い髪が乱れるのも気にせず、早苗は激しく頭を振りながら上目遣いに少年に熱っぽい視線を向ける。牝の精を欲しがる牝の生々しい視線を向けられ、心臓の鼓動が跳ね上がり異常なまでの興奮を覚えた。ゾクゾクと背筋が震えて下半身を襲う肉悦と混ざりあつて、肉棒の根元まで欲望の渦は込み上げてきている。

「出るッ? もう出ちゃう!? 出して出して、いっぱい精液飲ませてえン♪」

自らも乳ズリの快感に酔ってしまったかのように声を弾ませる早苗が亀頭にむしゃぶりつく。ミルクまみれになった乳房は温かくて、極上の柔らかさが限界寸前の肉棒に射精を催促するように圧迫する。

ヂュウウウウ~~~~ッ! ムニユッ、ニユルニチュウッ……。

尿道の奥に込み上げてきている精液を吸い出さんばかりの強烈なバキュームフェラ。コリコリとした乳首が敏感な裏筋を擦り上げた。

「で、出るッ……出る出る出るうッ!!」

反射的に腰を突き上げると、早苗はパッキリと肉矛を咥え込んだ。そして自慢の爆乳を股間に押しつけるように腰に抱きついてくる。

ギリギリのところで保っていた理性が脆くも崩れ意識が白く弾ける。

ビュルッ！ ドビュドビュッ！ ビュクユビュルウウウ——ッ！！

肉幹に浮かび上がった血管が小刻みに脈動し、口の中に亀頭の先から凄まじい勢いで精液を吐き出した。我慢に我慢を重ねただけあつて射精は、腰が蕩けてしまいそうなほどに甘美であまりの気持ちよさに意識が飛びそうになる。

「んっ、んむう、んうう……ちゅ、ちゅぶ……」

一瞬だけ眉がピクリと動いたが、早苗は目を細めながら口の中で白濁液を受け止め続ける。射精中の亀頭を吸い上げつつ、乳房で肉竿を抜き敏感になっているペニスをさらに責め立てた。

「うは……はあはあ、はああ……」

無遠慮に吐き出される精液の量は朝に三発も射精したにもかかわらず凄まじく大量で、早苗の朱唇の端からトロリと白い雫が垂れ落ちる。

美女はそれを小指ですくい、口元へと運んだ。

「んくっ、ごくっ……ッぷはあ、ユッキーの精液、とっても濃くって喉に絡みついてきて、おいしい……」

唇を指で押さえながらワザとらしく喉を鳴らして、口内に溜まった精液を飲み干し、年



色々と考えているとドアが開いて黒猫が入って来る。

「きゃあつ！ な、何よこいつ!？」

しゃべる猫の登場に美貴は胸元を手で隠し悲鳴を上げた。普通のリアクションを見せるお嬢様とは反対に、素早くシャツの胸元は閉じながらも、かなみはジッと黒猫を見つめている。

「おいで……」

そして手招きをして黒猫を抱きかかえようとしていた。

「お、嬢ちゃん、髪の毛だけじゃなく心まで俺色に染まっちゃったかな？」

ピョンと床を蹴ってかなみの膝の上に着地し、身体をすり寄せる黒猫。

「ちよ……な、何しにきたんだよ！」

他人に、いや人ではないが、真っ最中に乱入されてはさすがに焦る。

しゃべる猫を見て慌てるお嬢様に比べ、幼馴染みはやけに冷静と言うか普通のままなので少し驚いた。

「お、長内！ な、何なの……こ、こいつはッ!？」

まるで少年の後ろに隠れるように腕に抱きつき、意外な反応を見せる美貴は恐いのか声が震えていた。そんな姿が可愛かったけど、死神の使者らしいということを説明するとさらに身体に抱きついてくる。

「何よもうつ、ビックリさせないでよね！」

取り乱したところを見られたのが恥ずかしいようで、美貴はふいっとそっぽを向いてしまふ。

そんなお嬢様にお構いなくゴロゴロと喉を鳴らしながらかなみに顔を擦りつけていた黒猫が思い出したように口を開いた。

「てゆうか、お前あの先生と姉ちゃんになか脛出ししたろ？
 そのミルク飲んじやつたら脛出し以外じゃミルク出なくなるぞ」

「ああ、道理で……つて、えええええつえゝゝゝッ!？」

そんな裏設定があつたなんて聞いてないよと叫びたかつたが、死の呪いがある時点でも何があつてもおかしくはないのかもしれない。脛なか出しすればミルクは出るなら一応呪いを解くことはできるけど、安心している場合ではなかつた。

「先生と姉ちゃんに睦出し？ どういうことか説明してもらおうかしら……」
こめかみをヒクヒクさせながら美貴が肩を怒らせている。

「えっ、え……それって……その、しちゃったってこと……？ 舞衣さんとも……？」

黒猫もそちのけでかなみも嫉妬の色を孕んだ視線で見つめてきた。

「い、いや……それは……」

舞衣との関係だけでなく、姉や先生とセックスしたことまでバラされて慌てる雪伸だがいきなり上手い言い訳など思いつくはずもない。少年の動揺が彼女達に黒猫の言っていることが本当のことだと確信させる。

「まさか最近ずっと先生やお姉さんとエッチばっかしてたんじゃないでしょうね？」

「だからわたし達のおっぱいは飲んでくれなかったの？」

「えっと、その……」

「もう最低っ！ アンタ浮気ばっかりじゃないのよっ!!」

「そうだよ、先生にも協力してもらってることは知ってたけど、舞衣さんもなんて。それにエッチまでしちゃうなんて……」

「で、でも仕方がなかったんだって……」

美少女達の非難の嵐に晒され必死に弁解するが、結果的には彼女達を裏切ってしまった心が痛んだ。

「まあまあ、落ち着け。こんな奴の女なんてやめて俺様の……」

「アンタはもう用済み！ さっさと部屋の外に出ていきなさいよ!!」

さすがの黒猫も美貴の睨みには勝てず、ブツブツと言いながら部屋を出て行く。

「チッ……てめえの周りの牝は乳がデケーと態度までデカいな……」

情報提供者が部屋から出て行ったのを確認すると、金髪少女はくると雪伸の方に向き直る。ツインテールがまるで二本の角のようで、全身から怒りオーラが出ていた。

「アンタみたいな節操なしにはオシオキが必要なようね……」

「そうだよ、ちゃんと話してくれればいいのに」

美貴に怒られている時はいつも味方だった幼馴染みも、今回ばかりは弁護してくれない

ようだ。

「あの……黙ってたのはゴメン……でも話してもマズいんじゃない……」

話しても怒られるけど、黙っていてバレた時にはもっと怒られる。まるで隠していた失敗を母親に見つかった時のような気分だった。それなのに股間の逸物は少女達の視線を浴びて再びムクムクと勢いを取り戻してくる。

「もう、何でもこんな時にそこを大きくしてるのよ!? こんな節操なしのバカチ○ポはこうしてあげる!」

顔を真っ赤にしたお嬢様が、射精をしたばかりだというのに勃起し始めている逸物を爪先で踏みつけた。

「うぎゃっ! ほ、北条さ、んッ……」

ソックスに包まれた足の裏が男根にグニグニと押しつけられる。

「美貴さん、何してるんですか!？」

「言っただでしょ、オシオキよ! ほら、かなみさんは手を押さえて!」

恋敵の思わぬ行動にかなみは驚いて声を上げた。しかし美貴は足を動かして肉棒を擦るように刺激してくる。慌てて身体を起こそうとしたが、横から幼馴染みが抱きついてきて逃げられない。

「え、かなみっ……なんでっ……」

「むう……雪伸君はちよっとオシオキしてもらった方がいいかも……」

「そ、そんな……」

姉や先生とエッチをしていたということを知った少女達の嫉妬はかなり大きく、普段は少年を取りあい争っている二人だがオシオキのために一時的に手を組もうというこころしい。

「アンタは、たっぷりと反省しなさい！」

本気で押し潰そうというわけではなく、股間を襲う圧力は手加減されていた。それでもペニスを踏まれるという未知の感覚は衝撃的で少年は呻き声を漏らす。

「うう……くっ、やめて……」

性器を足で弄られているというのに、抗議をする声は弱々しい。情けない反応がお嬢様の嗜虐心しぎやくしんをますます煽り、足責めをやめるどころかさらに強く押しつけてきた。天井に向かっていきり勃つ肉棒を腹部にグリグリと押しつけられる、そんな姿を少女達に見られているせいで恥ずかしくて声が詰まる。

「フン、なんて声出してるのよ。もしかして踏まれて気持ちいいの？」

「そ、そんなことない……」

自慢の巨乳を抱くように腕を組み見下ろしてくる姿はまるでSMの女王様のように、興奮のせいかサファリア色のツリ目は鋭く輝いている。まさか逸物を踏まれて悦ぶような性癖など持ちあわせていないつもりだったが、ごわつく綿の生地越しに温かい体温が伝わってきて何だか心地いい。

「きゃっ、何よ！ しっかり感じてるじゃない！」

少女の細い脚を持ち上げんばかりの勢いで逸物は硬くなっていった。

「これは……ちが、違うっ……」

屈辱的な行為にもかかわらず倒錯した刺激に身体は反応し、急速に下半身へと血液が集まり肉棒の海綿体を膨張させた。

「違うんでしょ、あたしの足で興奮しちゃったんでしょ」

「うあっ……」

さあ答えろと言わんばかりにグッと重心をかけられ、竿全体が腹部につくほどに爪先で押しつけられる。股間にのしかかる圧力は苦しいようで甘美な圧迫だった。

「雪伸君、大丈夫なの……？」

少年とクラスメイトの顔を交互に見つめながら心配そうに声をかけるが、目の前で繰り広げられる変態的な行為のせいで顔が赤い。

「大丈夫に決まってるでしょ……だってほら、こんなに勃起してるのよ」

足が離れると肉棒はピンッと天井に向かってそそり立ち、浮かび上がった血管がビクビクと震えている。しかも先端からは透明な液がとろりと溢れてきていた。

「足でされて興奮するなんて変態だよ……」

「そういうわけじゃ……うっ……」

男根を足蹴にあしげされて快感を感じ始めていたことをかなみに指摘され、少年は恥ずかしそ

うに声を詰まらせる。こんな情けない姿を好きな少女に見られているというのに、意思とは関係なく男根は硬く勃起して脈動を続けていた。

「フン、変な声出しちゃって……」

足で男子の逸物を弄び悶えさせている性戯はお嬢様の心をくすぐり、口元には妖しい笑みまで浮かべている。

「ほ、北条さんっ、変なことは……くうっ、や、やめてッ……」

「何言ってるのよ？ 変なことされて悦んでるくせに、ほらほら」

今度は一度射精したというのにパンパンに膨れた肉袋を爪先で突つつき、身悶える少年の反応を楽しんでいる。舞衣や早苗にもあまり触られたことのない箇所を足で刺激され、気持ちいいのか悪いのかよく分からない変な感触だった。

「わ、わたしも雪伸君にオシオキする……」

異常な痴態を目の前にして呆気に取りられていたかなみが不意に宣言する。

「ちょ、かなみ……何を、ひゃあっ!？」

突然に幼馴染みは胸元に顔を寄せてきた。長く艶やかな黒髪が肌に触れたくすぐったさを感じる間もなく、乳首に生温かい軟体物が這い電流を流されたような刺激が走る。

好きな男の子が別の少女に屈辱的な責めを受けているのに、止めるのではなく彼女まで参加してきた。男でも敏感な乳首をペロペロと舐め、反対の方も指で摘むように弄つてくる。

「ふ、二人とも……落ち着いてッ……あぁっ！」

足コキに乳首責めと男にとってはかなり恥ずかしい責めだ。それなのに一舐めされるたびに股間の逸物はビクンッと跳ね、擦りつけられるソックスに先汁を漏らしてしまう。

「こんなことされて悦ぶなんてホント長内は変態ね……」

チェックのスカートから伸びる脚は細く長くてしなやかだった。十代とは思えない圧巻のバストにばかり目が行きがちだけど、彼女の身体は全体的には細身でモデルのような脚線美を誇っている。その美しい足先がギンギンに勃起したグロテスクな逸物を弄ぶ。

「変態ってわけじゃ……うぁ、あぁ……」

天井に向かっていきり勃つ男根の先端を足指で下向きに押さえつけては離す。そのたびに痛いくらいに勃起した肉棒がブルンブルンと上下に動き回った。

「何よ、足で踏まれてビンビンになってるくせに……」

男根の弾力を楽しむように何度も反り返る逸物が踏みつけられ、バチンッと下腹部に当たるほどの勢いで跳ね戻る。そのたびに少年の口からは低い呻き声が漏れ、呼吸も荒く足コキの快感に翻弄されていた。

「す、すごい元氣……」

胸元に舌を這わせていたかなみも、その光景に目を見張っている。

「うっ、遊ばないで……」

足で性器を弄ばれる羞恥に打ち震える少年を見下ろしながらお嬢様は色めいた笑みを浮

かべた。

「そんなに足でされるのがいいならこうしてあげる……」

小悪魔じみた笑みを浮かべた美貴はベッドに腰掛けると、両足の裏で男根を挟み込み上下に扱き始めた。どこでこんなことを覚えたのか知らないが、肉棒全体を根元から包み込むように擦られて手や胸とはまた違う感觸の快感が股間を襲う。

「ああ、ダメっ……それは、ダメッ……」

股間に意識を集中させないと今にも射精してしまいそうなのに、乳首を責める幼馴染みがそれを許してくれない。身体は少女達に翻弄され、射精感と肉悦だけが急速に膨れ上がっていく。

「ちゅ、ちゅう……足で擦られるのがそんなに気持ちいいの？」

「あ、くうっ……そ、それはッ……」

どこか呆れたようなかなみに見つめられても、答えている余裕はなかった。股間の奥から湧き上がる欲望を必死に抑えつけるのに、自然と腰が浮き上がり心臓の鼓動も激しくなる一方だ。

「靴下ビショビショになっちゃってるけど、もう出そうじゃないの？」

スカートが捲れてショーツが見えるほど蟹股がにまたに脚を開いているのに、お嬢様は氣にした様子もなく足責めに夢中になっていた。慣れてきたのか足の動きはスムーズになり、テンポよく逸物を扱き上げる。



どれも魅力的な美女の生おっぱいを見つめているだけで、男の本能が刺激され性欲が起き立てられる。

「雪伸君もやっぱり胸は大きい方が好きなの……？」

少年を想う気持ちは人一倍だが、さすがにこの巨乳を見せつけあう争いには参加できず黒髪の少女は悲しげに声のトーンを落とした。

「それは……でもかなみのおっぱいだって好きだよ！ 感度がいいって言うか、触った時の反応が可愛いって言うか……」

必死にフオローしたつもりだったが、本人が顔を真っ赤にして俯いているのに気づいて言葉を止めた。

「あ、ありがとう……」

こうやって正面から褒められるとやはり恥ずかしいのか、はにかんだように笑いながらかなみは身体をくねらせている。

「お姉ちゃん以外とのラブコメ禁止！」

奥手なカップルの会話のような二人のやり取りに、姉の嫉妬心は爆発。メートルオーバの丰满な乳房を抱きかかえ、逸物を挟み込んでしまった。

「あうっ！ ね、姉さんっ……」

一瞬にして雪伸の意識は股間へと引き戻される。

マシユマロのような乳肉の間で若い男根が正直すぎるくらいに反応し、激しく脈動して

跳ね踊った。

「大きなおっぱいの味を思い出させてあげるわ……」

「雪伸がして欲しそうだからやってあげるんだからね……」

自らのおっぱいを抱えた早苗と美貴もうつ伏せになって左右から自慢の乳房を肉棒へと押しつける。

「う、ああ……」

舞衣のおっぱいに挟まれているだけでも気持ちよかったのに、さらに二人分の巨乳が加わり下半身が蕩けてしまいそうな感覚に包まれる。異なる柔らかさと体温の乳房がペニスを取り囲み、グニグニと優しく竿を締めつけてきた。

痛いくらいに勃起した逸物を三方向から迫る乳房が奪いあう。万人が認める美女達に囲まれこの上ない贅沢な気分だった。

「雪伸君……」

股間に広がる柔らかな乳感に心を奪われていた少年に、幼馴染みの少女が抱きつく。そして胸布の端から取り出された乳房を口元に押しつけられる。

「んぐっ、かなみ……!？」

先ほど搾り出したからなのか、すぐに口の中には甘いミルクの味が広がった。

「好きなだけ飲んでいいから……」

そう言いながら少年の胸にある黒いアザを優しく撫でるかなみ。本当に自分のことを心

配してくれているのが伝わってくる。

「ほらほら、そっちばっか気にしていいの？」

グニユ、ズチャッ……ズリユ、ズリユ……。

まず早苗が乳房を大きく上下に揺らして逸物を抜き始めた。その動きにつられるように舞衣と美貴もそれぞれのおっぱいを動かして男根を刺激する。包まれているだけでも気持ちよかったのに、すべすべの乳肌で扱かれると股間に甘い感触が広がっていく。

「あくっ、いきなりそれはっ……」

巨大な乳肉が押しあいへしあいペニスを抜き上げ、強烈な乳圧の中で逸物は苦しげに脈動し思わず呻き声が漏れた。

凄まじい快感に圧迫された肉棒は痛いほどに張り詰め、大量の血液が海綿体を膨らませ僅かに顔を覗かせている先端から透明な我慢汁が溢れてくる。

「ねえ、ユッキー……先生のおっぱい気持ちいいでしょ」

量感たっぷりの乳房をグラインドさせ、ぐっちゅぐっちゅと摩擦する乳肌はどんどんと熱を帯びてじわりと汗ばむ。その汗が乳擦りの潤滑を助けて敏感な肉棒を容赦ない責めが襲う。

「先生よりもお姉ちゃんの方がいいよね」

男根を独占しようとする教師の動きをおっぱいで制した。正面というポジション的に優位な舞衣はグイグイとHカップの乳房を押しつけ敏感な裏筋を柔肌で擦り立てる。

「あたしが一番に決まってるわよねっ……んっ、くふ……」

弾力で勝る美貴のバストが突き出されると、舞衣や早苗の乳房はぐにゃっと大きく歪み形を変える。

サイズの大きさで言えば早苗が一番で舞衣、美貴という順で柔らかさも大きさに比例していた。しかし弾力や張りとは言うとな逆になる。積極的に動いているのは早苗と舞衣だが、そのおかげで美貴のおっぱいとぶつかりあうと押し負け気味だ。

他の二人にサイズでは負けていると言ってもお嬢様の巨乳だつてとても柔らかく、そのうえたつぷりとした質感がペニスを包むので、今までとは一味違うパイズリの快感に股間は蕩けそうになる。

「うぐっ……そんなに擦られたらすぐに出ちゃいそうだっ……」

トリプルパイズリの快感の渦に全身が飲み込まれ、意識は下半身に集中し肉悦以外何も考えられなくなる。

「かなみも、かなみのおっぱいも……」

口に押しつけられる美乳にも無意識のうちにしゃぶりついていた。

吸っている方とは反対の乳房も手で揉みまわすと、むっちりとした乳肉が白いエプロンを押し上げ布地にミルクが滲み出てくる。

「何だか、おっぱいが擦れちゃって先生も気持ちいい……」

激しくぶつかり擦れあう美女達の乳房は上気し、その中心でいきり勃つ男根にも負けな

いくらい熱くなっていた。

「もう、そんなに胸を押しつけないでよ……」

逸物に胸を擦りつけるだけでなく、同性と乳房を擦りあわせる痴態に美貴の顔は真っ赤になっている。恥ずかしがっている姿をライバル達に見せたくないのか、強気な姿勢は崩さないが息が荒く吐息が熱っぽい。

「はぁん……わたしも変な感じに、あぁっ……」

乳摩擦の快感に男根を取り囲む乳海も汗で濡れ、ニチャニチャとうねる乳肉と逸物が密着し擦れあうたびに淫質な水音が響く。

「はうっ、んんっ……雪伸君っ……」

肉棒を直接刺激する乳悦はもちろんのこと、乳首を吸うたびに可愛らしい悲鳴を上げる幼馴染みの反応も興奮をさらに高める。手のひらに収まり抜群の揉み心地を誇る美乳を少し強めに搾り、ちゅうちゅうと音を立ててしゃぶりまくった。

快感に悶えながら恥ずかしそうにまぶたを伏せて身を振るかなみは本当に可愛らしく、優越感と牡の欲望を刺激する。

「あぁんっ……はぁ、あぁっ……雪伸のオチ○チンどんどん熱くなってるぅ……」

「な、何だか……はぁん……あぁ、おっぱいが出ちゃうっ……」

パイズリで乳房と硬くなった乳首を擦られた快感で、お嬢様のおっぱいからミルクがびゅるびゅると噴き出る。サラサラとした乳液は他のおっぱいと絡みあい、乳摩擦の潤滑

油がわりになった。

「やあん……んはっ、美貴ちゃんのおっぱい温かい……」

水気が増したことで乳肉の動きはさらにスムーズになりその快感は加速する。逸物を擦られてゐる雪伸はもちろんだが、女達の吐息も熱っぽく変化した。

「あはあ、んはっ……胸が気持ちよくて……あ、ああんっ……」

「せ、先生もおっぱい出ちゃうっ……」

舞衣と早苗の爆乳からも立て続けに母乳が溢れ、六つのミルクタンクからは大量の乳白液が噴き出し互いの乳房を濡らした。

「う、うあっ……そんな、エッチすぎっ……」

ミルクまみれになった乳肉はにゆるにゆると擦れあい、その中心に挟まれたペニスは堪ったものではなかった。先端からは先汁が溢れて母乳と混ざり、乳房はさらにドロドロに濡れていく。

「ダメ、雪伸君はこっちっ……」

ミルク乳責めに下半身は夢中になっていた。その大迫力の乳奉仕に見とれかかっている、かなみがその視線を塞ぐように自らの乳房を押しつけてくる。

「んぐっ、かなみっ……」

視界を失ったことで三人の動きが予測できず、快楽神経が自然と敏感になり無防備な肉棒が淫悦の荒波に晒された。

「チ○ポがビクビクってなってるわ……もうイっちゃいそうなの？」

男根を柔らかい乳房がにちゅにちゅと水音を立てて擦り、コリッとした乳頭が引っかいていく。

「やばいつ……出そうっ……」

湧き上がる射精感に腰がビクつき、快感に悶えながら少年は、身体を仰け反らせ身悶えしているかなみの乳房にしゃぶりつき濃厚なミルクを吸いまくる。

「あぁっ……は、激しいよおっ……」

全身に汗が滲み少しでも気を抜けば射精してしまいそうなほど快感は高まっていた。

「ほら、いきそうなら、はぁン……さっさといきなさいよっ！」

「あふ……ン……は……いいのよ……お、思いつきり出してー」

「お姉ちゃんに、ああ、ンはぁ……雪伸の精液を飲ませてちょうだいっ……」

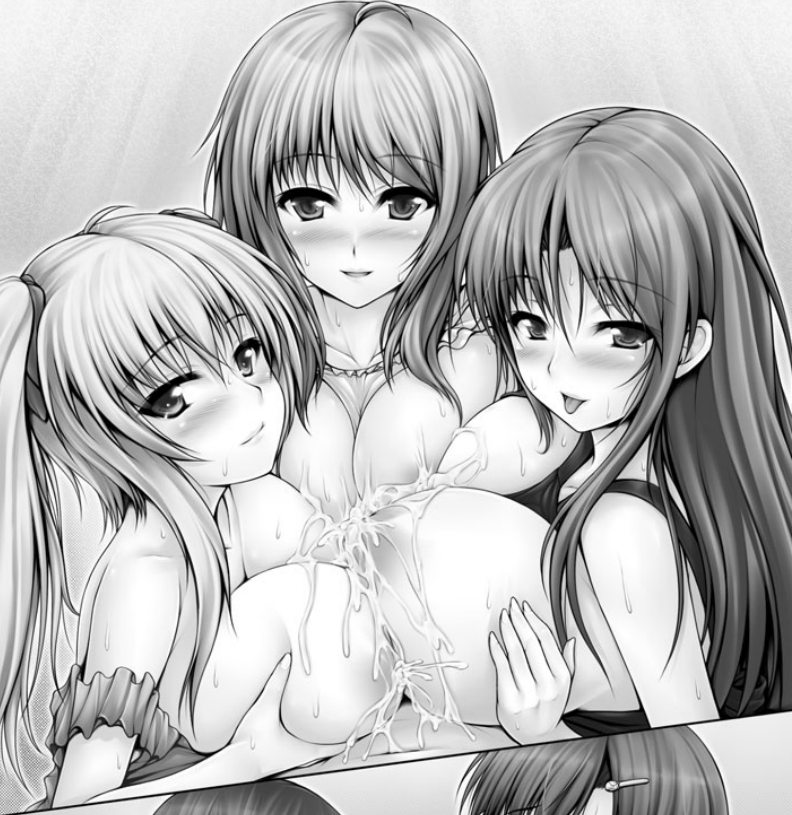
汗と先汁にミルクの混ざった体液を塗りあうようにぬりぬりゆと乳房はうねり、肉棒を抜く激しいパイズリの圧迫に少年も限界だった。

「あぐっ……もう我慢できないっ！ 出るッ……出る、うああああッ!!」

射精を堪えていた力がそのまま下半身にこもり、一気に駆け上がる絶頂感に目の前が白く弾ける。

ドビュッ！ ドビュビュッ、ビュルルルウウ——ッ!!

低い呻き声とともにひしめきあう乳房の中心で首を出した亀頭から、欲望の塊が噴き出



した。ムツとした臭いを放つ白濁液が次々に少女達の美貌を打ち、髪の毛やエプロンにまで飛び散る。

「きゃっ、熱うい……」

大量の精液を吐き出す肉棒の先端を愛しげに見つめる舞衣。

「な、ちよつとは遠慮しなさいよっ……」

凄まじい勢いで跳ね回る白濁液に少し驚きつつお嬢様は頬を染めている。

「あらあら、すごい量ね……」

早苗も小悪魔のような笑みを浮かべながら顔についた精液を指ですくって舐め取っていた。

三人とも顔や乳房を汚す白濁液を避けようともせず、むしろ恵みの雨を浴びるように恍惚とした表情を浮かべている。

「はああっ……」

射精が終わると今度は急に脱力感に襲われ、快感の余韻に浸りながら溜め息をつく。

しかし少年に休んでいる暇はなかった。

「ねえ、雪伸君……エッチしようっ……」

單純に嫉妬なのか目の前であれだけの痴態を見せつけられて少女自身も淫欲に染まってしまったのか、トロロンと瞳が蕩けて今までに見たことがないくらい官能的な表情だった。

「えっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>